

Contents *****

特集：戦い済んで～総裁選へのオタク的感想	1p
<今週の”The Economist”誌から>	
“Going round in circles” 「自民党のサークルゲーム」	8p
<From the Editor> レースの後で	9p

特集：戦い済んで～総裁選へのオタク的感想

注目の自民党総裁選挙は、岸田文雄氏の圧勝に終わりました。本日 10 月 1 日には既に新しい自民党役員人事が固まり、注目は週明けの新内閣の組閣に移りつつあります。この先もいろいろあるでしょうが、「久しぶりに面白い政局を見た」という気がします。

「政局」とはこの世界における不思議な呼称でありまして、正しくは「権力闘争」と呼ぶべきなのでしょう。永田町内の秩序が変化する期間のことを指し、その都度、勝者と敗者が生まれ、新しい秩序が誕生します。これを何度も繰り返してきたお陰で、自民党は組織としての鮮度を保ってきたのでしょう。さて、わが国の政治体制はどんな風に変化しているのか。今回の総裁選を振り返りつつ、岸田新内閣の行方を予測してみましよう。

●”September Surprises”～投票結果を読み解く

それにしても先月は、驚くようなニュースが多かった。内外ともに、これだけ「サプライズ」が続くことも珍しい。

- * 9 月 3 日、菅義偉首相が事実上の退陣表明
- * 9 月 15 日、米英豪「AUKUS」が豪州向け原潜技術供与を表明。フランスが激怒。
- * 9 月 16 日、中国商務省が TPP への正式参加表明
- * 9 月 22 日、今度は台湾が TPP へ正式参加表明
- * 9 月 20 日、中国の恒大集団の経営危機で世界同時株安
- * 9 月 26 日、ドイツ連邦下院選挙で SPD の得票が CDU を上回る
- * 9 月 27 日、小室圭さんが帰国。眞子さまと結婚へ
- * 9 月 28 日、人気グループ「嵐」の櫻井翔、相葉雅紀が同時に結婚を公表
- * 9 月 29 日、自民党総裁選挙で岸田文雄氏が圧勝

溜池通信的には、海外ネタにも心惹かれるところなのだが、ここはやはり前号に引き続いて自民党総裁選挙を取り上げるべきであろう。

自民党総裁選挙においては、しばしば「意味深な数字」が登場し、「含蓄のある結果」がもたらされる。今回もその例に洩れなかった。1回目の投票は、なんと1票差で岸田文雄氏が河野太郎氏を上回った。さらに議員投票では、高市早苗氏が河野氏を上回るという番狂わせがあった。こんな結果は、狙って出せるものではあるまい。

<1回目投票>

	議員投票	党員算定票	合計
河野 太郎	86票	169票	255票
岸田 文雄	146票	110票	256票
高市 早苗	114票	74票	188票
野田 聖子	34票	29票	63票

<決選投票>

	議員投票	都道府県票	合計
河野 太郎	131票	39票	170票
岸田 文雄	249票	8票	257票

事前の予想では、1回目投票では党員票に強い河野氏が1位となるものの、決選投票で岸田氏、高市氏の「2位3位連合」に敗れる、というものであった。この場合、新しい総裁は、議員票で党員票をひっくり返したという「後ろめたさ」を抱えることとなる。そのために2位の候補者を幹事長とする、といった「党内結束」のための妥協が図られるので、結果的に弱い政権が誕生する公算が高かった。

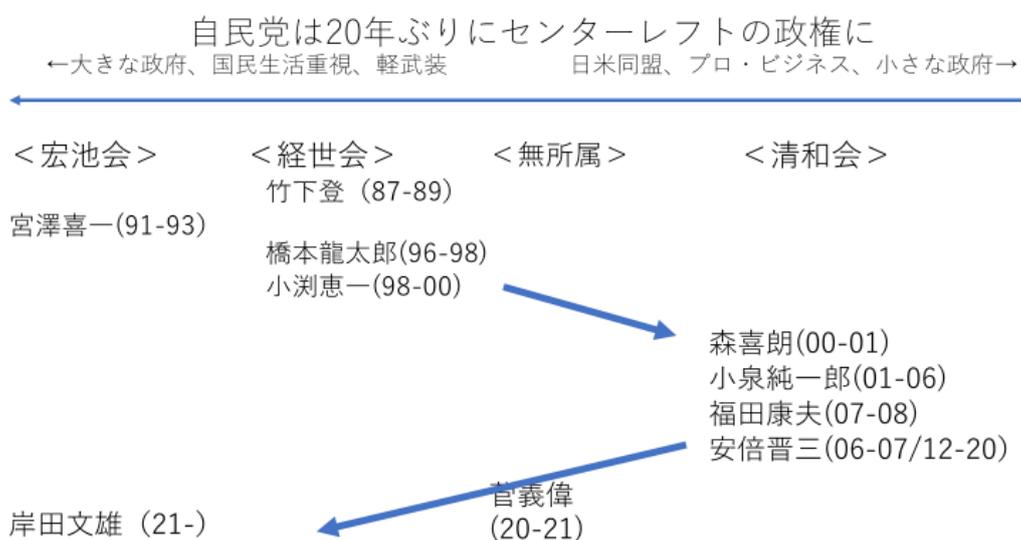
ところが岸田氏は「ハナ差」とはいえ、堂々の先行逃げ切り勝ちであった。これなら人事においても遠慮は不要となる。党役員人事においては、河野氏は党4役より一段下の広報委員長に指名された。これでは高市政調会長はもちろん、当選3回で抜擢された福田達夫総務会長よりも「格下の扱い」ということになる。

それでは、河野氏は決定的敗北を喫したのか。上の結果をよく見ると、決選投票では河野票が45票も増えている。議員心理としては、「勝ち馬に乗ろう」と1回目よりも票数が減っても不思議はなかったところだ。これは党内に、反・岸田勢力が一定数存在することの表れであろう。まだまだチャンスはある、と考えてよいのではないだろうか。

●センターレフトに「+アルファ」が必要だった

過去の自民党総裁選挙の歴史を振り返ると、2000年以降はほとんど清和会（右派）が首相を輩出してきた。それ以前は、経世会や宏池会（左派）の首相が多かった。その点、今回は河野氏でも岸田氏でも、久々に元宏池会の流れをくむセンターレフトの総裁が誕生することが当初から予想されていた。初の無派閥首相であった菅義偉氏は、その中間に位置する存在だったと言えるかもしれない。

20年周期で自民党内の振り子が動いていると考えると、なかなか興味深い動きと言えるのではないだろうか。



2

考えてみれば、海外でも左派政権の優勢が続いている。米国では昨年、共和党のトランプ大統領を破って民主党のバイデン政権が誕生した。9月26日に行われたドイツ連邦下院議会選挙では、長らく政権を担ってきたCDUの得票をSPDが上回った。9月20日のカナダ総選挙では、トルドー首相率いる自由党が保守党の追撃をかわして、かろうじて第1党の座を維持している。

コロナ下の政治は、どうしても「大きな政府」とならざるを得ない。そして感染を食い止めるためには、個人の自由をある程度犠牲にして、公共安全を優先しなければならない。そんな中で、自民党も徐々に党内左派にボールが回るということになる。

ただし安倍晋三元首相は、「このままではいけない」と感じたようである。自民党総裁選では、コアな保守層にアピールする新しいスターを作る必要があった。そこで高市氏の応援に動いたわけだが、彼女もまた高い説明能力を示してその期待に応えた。特にネット空間での高市ブームは大変なものだった。やはり自民党支持層の一部は、「防衛力強化、保守的な家族観、皇室重視」というタイプの候補者を求めているのである。

実際のところ、センターレフトの総裁を担いで支持者を左に広げたとしても、「右派の支持」が弱いと自民党は選挙に勝てないのである。7月の東京都議会選挙、8月の横浜市長選挙において、自民党は支持層の6割しか固めることができなかった。逆に通常の選挙においては、「自民党支持層の8割を固めれば勝てる」と言われる。自民党は急いで、コアな保守層を活性化する必要があったのだ。

今回の総裁選において、安倍氏は3つの目標をすべて達成したと言える。すなわち、①新しい右派のスターを育成し、②盟友、岸田氏の総裁就任を実現し、③なおかつ党内にキングメーカーとしての存在感を示す、である。まさにパーフェクトゲームだが、これだけの成功を収めてしまうと、後で何らかの形で反動が出るようにも思える。

●海外の見る目は国内よりも厳しい

海外メディアは、今回の自民党総裁選挙をどう見ていたか。「今週のThe Economist誌から」(P8)で取り上げた9月23日時点の記事”Going round in circles”は、見事な日本政治分析である。それでは選挙結果に対して、同誌はどんな評価を下しているのか。

10月2日付の記事は、案の定”Uninspired” (つまらない) という評価であった¹。以下の冒頭部分だけをご紹介します。河野氏の人気があったが、それは彼を軟弱と見る右派にとって「最悪のシナリオ」であった。左派もまた、右派の高市氏を恐れた結果、真ん中にいた「つまらない」岸田氏が勝ったという評価である。

“WE AVOIDED THE worst-case scenario,” ran one hashtag trending on Twitter after the election on September 29th of Kishida Fumio as president of Japan’s ruling party. For the right-wingers promoting the slogan, the “worst case” was Kono Taro, a popular and independent-minded minister who won the most votes in the first round of the election. They see him as too liberal to lead the inaptly named Liberal Democratic Party (LDP). But Japanese liberals were relieved, too. For them, the worst case was Takaichi Sanae, a nationalist firebrand.

もうひとつ、9月29日付のNew York Times紙の報道も、冒頭部分のみご紹介しておこう²。こちらはいかにも米国流で、「黨員票で負けていた議員が勝った」ことを問題視している。この辺は、「いやいや、間接制民主主義では違うんですよ…」と説明しても、あまり理解してもらえそうにない。

TOKYO — In a triumph of elite power brokers over public sentiment, Japan’s governing party on Wednesday elected Fumio Kishida, a former foreign minister, as its choice for the next prime minister.

By selecting Mr. Kishida, 64, a moderate party stalwart, in a runoff election for the leadership of the Liberal Democratic Party, the party’s elites appeared to disregard the public’s preferences and choose a candidate who offered little to distinguish himself from the unpopular departing prime minister, Yoshihide Suga.

¹<https://www.economist.com/leaders/2021/10/02/japan-deserves-better-than-an-inoffensive-prime-minister>

² <https://www.nytimes.com/2021/09/28/world/asia/japan-ldp-fumio-kishida.html>

ちなみにNY Times 紙は、岸田氏は党のエリートで菅氏と大差がない、と言っているがこれは事実誤認である。菅氏は以前から岸田を嫌っていて、今回の総裁選でも同じ神奈川県選出の河野氏を勝たせようとしていた。むしろ河野政権が誕生していた方が、菅前首相の影響力は強く残っていたはずである。

などと海外の評判は散々だが、国内では違おうだろう。来週にも出始める世論調査において、新内閣は 50~60%程度の支持率を得るのではないだろうか。「ご祝儀相場」があるだろうし、岸田氏は久々のフルスペック総裁選を大差で勝ち抜いている。菅首相や二階幹事長には喧嘩を売ったけれども、引き続き「いい人」のイメージのままである。

もう一点、コロナの感染状況は 9 月に急速に落ち着き、今月からは緊急事態宣言が解除されている。このところ、内閣支持率と感染状況は連動しているから、新内閣は高い支持率となるはずである。となれば、選挙は次の感染拡大が来る前が望ましく、新内閣は投票日をなるべく手前にセットしようとするだろう。

ということで、前号で示した「当面の政治日程」を、以下の通り修正しておきたい。

9 月

自民党総裁選挙投開票 (9/29) →岸田新総裁が誕生

10 月

緊急事態宣言を解除 (10/1)

自民党役員人事 (10/1)

→党 4 役は甘利幹事長、福田総務会長、高市政調会長、遠藤選対委員長

臨時国会召集 (10/4) →首班指名、組閣、新内閣発足

ノーベル賞ウィーク (10/4 医学、10/5 物理、10/6 化学、10/7 文学、10/8 平和)

岸田首相所信表明演説 (10/8) →各党代表質問へ

衆議院解散? (10/14)

G20 財務相・中央銀行総裁会議 (10/15-16) →新財務相が出席

世銀 IMF 年次総会 (ワシントン、10/15-17)

衆議院議員の任期満了 (10/21)

参議院補欠選挙 (10/24) →静岡選挙区と山口選挙区

衆議院選公示? (10/26) →11/2 説も

G20 サミット (ローマ、10/30-31) →前後に**米中首脳会談**も?

11 月

COP26 (グラスゴー、10/31~11/10)

衆議院選挙? (11/7) *赤口→11/14 説も

APEC 閣僚会議・首脳会議 (NZ、11/8 の週) →オンライン開催

特別国会召集 (11/17) →第 2 次岸田内閣が発足

→補正予算を審議 (数十兆円規模?)

●「菅内閣の置き土産」は大きかった

4 人の候補者の間では、約 2 週間にわたって政策論争が繰り広げられた。当初はコロナ対策が多かったが、やがて**年金改革や原子力問題といった中長期のテーマが多くなった**。また保守政党たる自民党総裁選の中で、選択的夫婦別姓などの社会問題が取り上げられたのも画期的なことだったと言えよう。

あらためて思い起こすと、この夏までのわが国は「コロナ下でどうやって東京五輪を実施するか」という国家的な難題を抱えていた。そのストレスが限界に至って、菅内閣が退陣に追い込まれた、と言っても過言ではないくらいである。

しかし今になってみれば、オリパラは既に終わっており、感染状況も著しく改善している。ワクチンの接種状況に至っては、米国を抜いてしまった。気がついてみたら、次期首相を目指す4候補は、「喫緊の課題」に事欠くほどになっていたのである。

つくづく感心するのだが、菅義偉内閣がこの1年で達成した仕事量は膨大なものである。以下は筆者が勝手に10項目を選び出し、ランキングをつけてみたものだ。1内閣が1年間で成し遂げたとは考えられないほどの量である。

- ① ワクチン接種体制の構築。当初、「1日100万回体制」はとても無理ではないかと思われたが、ワクチンを2回接種した比率は10月1日時点で全人口の59.8%に至っている。11月前半には、希望する全ての人が打ち終わる予定である。
- ② 東京五輪の開催。いろいろ議論はあったにせよ、また無観客だったにせよ、とにかく大きな事故もなくイベントを終了させた。オリパラに参加したアスリートたちも、「ありがとう、菅さん」の思いだろう。
- ③ 「2050年カーボンニュートラル」の宣言。かなり困難な目標となるが、大方針を決したことは歴史に残る仕事と言える。岸田新首相はこれを引き継いで、いきなり今月末のG20ローマ会合や11月のCOP26グラスゴー会合に出席することになる。
- ④ デジタル庁の創設。わずか1年でスタートにこぎつけた。約600人の小さな組織だが、「デジタル敗戦」と言われた過去を否定できるか？。
- ⑤ 一連の外交成果。日米豪印による初のQuad会合、バイデン大統領との日米首脳会談、コーンウォールG7会合出席など。外交文書に「台湾」という文言を入れることはG7のコミュニケにも踏襲されたが、もとはと言えば日米間で決めたこと。長年の国際政治上のタブーを打ち破った。
- ⑥ 福島第一原発から出るトリチウム水の処分方法の決定。安倍内閣が先送りしてきた課題に目途をつけた。
- ⑦ 携帯料金の値下げ。結果的に4300億円分の負担軽減となり、家計の可処分所得がそれだけ増えたことになる。
- ⑧ 最低賃金の引き上げ。「最低時給1000円」を目指し、2021年は全国平均で28円と過去最高の上げ幅になった。
- ⑨ 不妊治療への保険適用。来年4月からスタートの予定だが、遡って今年1月から助成を拡充。年収730万円未満という所得制限も撤廃へ。
- ⑩ 過去の積み残し法案の処理。国民投票法案、種苗法、重要土地取引規制法など。総じて安倍内閣8年間のやり残しを一掃した1年であった。

昨年秋、まだ人気が高かった菅首相が解散に打って出ていれば、今回のような形で退陣することはなかっただろう。しかし菅氏は、選挙による政治空白を嫌って仕事に専念した。つくづくワーカホリック首相だったのである。今となっては、特に「ワクチンと五輪」を片付けてくれたことに感謝したいと思う。

●岸田内閣は短命に終わるのか？

8年に及んだ安倍長期政権の跡を継いだ菅首相は、わずか1年の短命内閣ということになった。こうなると嫌でも、小泉政権終了後の政治混乱期が思い起こされる。岸田内閣もまた短命となってしまふのであろうか。

前号「自民党総裁選トリビア」の中で、「総裁の早慶戦は7対2で早稲田が圧勝」であることをご紹介した。これは実は、「早稲田出身者は短命政権」であることの裏返しであり、最長でも海部俊樹氏の818日（2年2カ月）、最短の石橋湛山氏に至ってはわずか65日間である³。岸田氏もまた、この「早稲田の呪い」に挑戦することになる。

という変なジンクスはさておいて、客観情勢が不利というわけではない。何より来月に予想される選挙に勝たなければならないが、自民党総裁選と総選挙に勝った総裁の地位は安定するはずだ。その次に控えているのは、来年7月に予定されている参議院選挙となる。これもクリアしてしまえば、その後は2024年9月に到来する総裁任期まで、国政選挙がない安定期を迎えることができる。

そのために必要なことは何か。前述の通り、岸田氏は自民党における「20年ぶりのセンターレフト総裁」である。安倍＝菅政権の9年間は、プロ・ビジネス政治の時代であった。端的に言えば、消費税を2回上げて、代わりに法人税を下げている。「成長」に力点を置く政治であったことは間違いないだろう。

その後を受ける岸田内閣が、「新しい日本型資本主義」や「成長と分配の好循環」といったテーマに取り組むことには、必然性があると言っていいだろう。ただし、そのための具体策はといえば、どこかにお手本があるわけではない。世界中の左派政権が、思い悩んでいるテーマである。一例を挙げれば、岸田氏が公約に掲げていた「金融所得課税の強化」は、高所得者への課税を強化する分かりやすい手口だが、「貯蓄から投資へ」という高齢者の資産形成を妨げることになる。もちろん株価に対してもマイナスである。

ひとつのアイデアは、バイデン政権が目指している「人への投資」というやり方だ。現状では、「American Family Plan」と銘打った3.5兆ドルのインフラ投資案は、与野党間でもみくちやになっているが、「働く人に投資する」という方向性は間違っていないはずである。

岸田氏は早い時期から「数十兆円の対策が必要」という大胆な言い方をしていた。総選挙後に、「人への投資」を含む補正予算を素早く、大きな規模で実施できるかどうか。そのことが、政権長期へのカギを握るのではないかと拝察している。

³ 他に小渕恵三 616日、竹下登 576日、森喜朗 387日、福田康夫 365日がいる。首相にならなかった河野洋平氏は除く。また民主党からは野田佳彦 482日がいる。

<今週の”The Economist”誌から>

”Going round in circle”

Asia

「日本政治のサークルゲーム」

September 23rd 2021

*”The Economist”誌の日本政治分析はまことに的確です。邦題は苦しんだ挙句、古い映画『いちご白書』の最後に流れる「サークルゲーム」という曲から連想しました。

<抄訳>

自民党の 4 候補者は多士済々だ。高市早苗は女性初の首相を目指すナショナリストで夫婦別姓に反対。河野太郎は米国で教育を受けた政治家一族で、同性婚や再エネを支持。岸田文雄は広島出身で新しい資本主義を目指す。野田聖子は障害児の母で弱者の味方だ。

古い政党にしては珍しい顔ぶれだ。ほとんどの派閥が自主投票を認め、9 月 29 日の開票まで結果はほとんど見通せない。大差で菅義偉氏を総理総裁に選んだ昨年とは大違いだ。

日本的には十分に熱気ある総裁選は、民主主義の混迷の結果でもある。西欧的なポピュリズムや機能不全を避けつつも、日本政治の安定は現状が支持されている結果ではない。政治的無関心が定着して、投票率は低下。国民の 62%が選挙で物事は変えられないと考え、自民党 (38%) や立憲民主党 (7%) よりも支持政党なし (41%) が多い。「大事なことは総選挙より自民党総裁選で決まる」から、野党が弱いのだと慶応大の曾根泰教教授は言う。

1955 年の結党以来、自民党は日本政治を支配してきたが、学者たちはこれを「ユニークな民主主義」と解している。一党支配ではなく、党内派閥が機能してきた。そして左派政党は、政府をチェックするだけでよかった。93 年には自民党を離脱したグループが連立内閣を作り、選挙制度を変えて政党間の競争を促した。連立はすぐに瓦解したが、その後、中道左派の民主党が成長して 09 年に政権を取り、2 大政党制が確立したように見えた。

それでも民主党は有権者を放置し、官僚機構を怒らせ、同盟国米国を心配させた。11 年に東日本大震災が生じたのも不運だった。有権者は政権交代を懸念するようになった。

12 年には自民党に敗れ、民主党は分解した。自民党は公明党と共に国政選挙で 6 連勝し、両院をしっかりと支配している。17 年には割れた旧民主の残党が立憲民主に戻ったが、なおも挑戦者足り得ていない。衆院における議席数は 113 に過ぎず、自民党は 275 議席である。

自民党のお粗末なパンデミック対応により、一時はチャンスが得られたように見えた。今までも不満が募れば、有権者は反乱を起こしてきた。自民党は地方選挙で連敗し、8 月の横浜市長選挙は大事件。来る総選挙では、いよいよ過半数割れの危険が身に迫ってきた。

不人気な菅氏が辞めたとき、自民党はなおも民意が急進的改革を懸念していることに期待した。それは成功しているようで、野心満々だった野党は、今やメディア露出を渴望する日々だ。自民党の支持は 10p も上昇し、東京株式市場は新首相誕生を持て囃している。

河野氏は中身はともかく変化を体現していて、世論調査ではリードしている。自民党を変えようとしている異端児との定評があり、党内の若手が支持している。

しかし党内の壁は厚い。記者会見では反原発と女系天皇の持論を封印したが、ベテラン勢はなおも警戒し、より柔軟な岸田氏を好んでいる。1回目の投票で過半数を取れば良いが、それがダメなら決選投票に勝たねばならない。そうすると党内政治の世界となり、2位岸田氏の目が出てくる。高市氏は高いポストを得るだろうが、野田氏の機会は乏しい。

勝者の最初の仕事は衆議院選挙で勝つことだ。自民党は議席を減らすかもしれないが、菅氏が率いるときよりはずっとマシだろう。ただし次期総裁が有権者とつながらない場合、来年夏の参議院選挙で新たな結論を突き付けられることになるだろう。

<From the Editor> レースの後で…

2号前の当欄で、自民党総裁選を競馬に例えた駄文を披露しました。以下はその直後に、某所で行った講演会の資料につけたものですが、あらためて読み返してみると、この馬券、取れてるじゃん。しかも3連単で！

○自民党総裁杯 (G1、永田町、フルスペック) 9/6 時点予想

* ボウヨミシヤドー	取消	現役最強馬がまさかの出走回避	
* タカイチホーク	▲	憧れの安倍厩舎の支援を受けて有頂天	→3着
* セイチョーハクブン		上司のパワハラを受けて出走回避	
* コウチカイプリンス	◎	セカンドフロアーに喧嘩を売って人気急上昇	→1着
* テツヲタマンモス	△	5度目の挑戦はあり得るか	
* ワクチンテイオー	○	人気は随一だが気性に難あり?	→2着
* カーボンバスター		若手筆頭株、初出走なるか	
* セイコママ		出走目指すも推薦人20人が微妙	
* トーキョーマダム	注	究極の最強牝馬。出走機会を窺う?	

週末の競馬もできればこんな風でありたいものですが、おカネが懸かると欲も出るの、なかなかうまくいかんものです。

そういえば今週末は久々にG1レース、スプリンターズステークス(中山・芝1200m)です。台風は来ているけれども、コンビニまで行って競馬新聞を買ってこようかなあ。

* 次号は10月15日(金)にお送りします。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記までお願いします。

〒100-8691 東京都千代田区内幸町2-1-1 飯野ビル <http://www.sojitz-soken.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)6871-2195 FAX:(03)6871-4945

E-mail: yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com